



## 序

その他のタイトル	Vorwort
著者	山下 肇
雑誌名	独逸文学
巻	27
発行年	1983-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017747">http://hdl.handle.net/10112/00017747</a>

## 序

今は亡き和田賀一郎教授を追悼する記念号として、本号は編まれました。和田教授が急逝されて、はや歳月は容赦なく流れすぎていきますが、教授を喪った私たち一同の悲しみは今も深く教室内に揺曳し続けているように思われます。語学関係の論文が本号におのずから多数寄せられたことも、教授への追慕の情の然らしむるところでありましょう。

私個人は、着任後、僅か半歳で和田さんと永のお別れをせねばなりませんでしたが、語る資格をほとんど持ちませんが、それでも、その半歳の間にも、和田さんと私の間の交流は不思議なほど親密度の濃いものとなり、遂に私にとっても和田さんは忘れ得ぬ人となりました。知る人ぞ知る、氏のお人柄です。

和田教授は当時「一般教育等研究センター」の委員で、私の永年の東大教養学部時代の経験に期待をよせて下さり、私の着任を待ちかねたように、同センターでの講演のご依頼を早速に受けたのです。それから和田さんは幾度となく私の研究室の戸を叩き、お宅の晩餐や音楽会などに誘って下さり、教授会ではいつも私の隣席に坐って話題を重ね、趣味の篆刻作品までいろいろお見せ下さるなど、このままお元気ならば、和田さんは私にとって関大で最もお近しい知友の一人となって下さったにちがひありません。

病中の和田さんに、私も何度かお見舞の便りをし、南紀の椿温泉から絵はがきの礼状を頂いたのが最後となりました。秋の「センター」での講演は、和田さん不在の空しい中で果さねばなりませんでしたが、新来の私でさえ、こんなにも懐かしい和田さんなのであります。

今も痛恨の思いに浸りつつ、謹んで本号を和田教授の御霊前に捧げたいと思います。

昭和58年3月

関西大学独逸文学会会長

山下 肇